

追悼のことば

相浦先生の突然の死が信じられません。相浦先生と私の専門分野は異なりますが、同僚として、一六年間、ともに語り、飲みました。語るといえば、議論は、たいいてい大学における体育実技教育のあり方についてでした。入学したての一年そして二年目どころか、大学生生活四年間を通して、いかに心身ともに鍛えるか、についてでした。機会あるごとに、大学での体育実技の授業の意味を問い、いつも提言しました。大学受験勉強と受験競争でくたびれている学生に、なにも一年目から難しい法学の専門科目など教えることはないではないか。まずは体育実技で心身を鍛え、そしてこれから先、長い人生において生活にはばを持たせるように、四年間通して運動の楽しさを体育実技を通して教えることに体育実技の意味があるのではないか。それにはもつと体育実技の科目数と時間を充実させるべきではないかと、結構、勝手な意見をぶつけました。専門領域でもないのに、勝手に他の専門領域にまで、生意気にも口出しした自分を、今となつては、大変失礼なことをしたと恥じています。しかし、相浦先生は、温厚でしかも包容力のある先生でした。いつも過激と思われる私の主張に耳を傾けていただき、聞いてくださいました。

そういえば、もう二〇年も前のことですが、あのころから毎年のように、法学部教授会の親睦をかねた小旅行を有志で企画しました。当初、どれだけ多くの教授会の先生方のご参加を得るかに腐心しましたが、いつも真つ先に、旅行の趣旨に賛同され、参加の意思を表明され、そして一緒に音頭を取ってくださいしたのは相浦先生でした。相浦先生の音頭で、腰の重い先生方の参加も実現しました。毎年、旅行が実現したのも、教授会の

親睦の重要性を理解し、賛同してくださった相浦先生のおかげでもありません。学部旅行の立役者でした。

研究に、教育に、いろいろ悩み、しんどいときもありました。そういう時、私の顔を見て、「吉川さん、しっかり頑張りんさいよ」と励ましていただいたことを昨日のことにように思い出します。同僚から励まされることは、とてもうれしいものです。元気が出ました。人の立場を思い遣り、人をひきつけてやまない人でした。一緒にいると、安心できる、そういう人でした。相浦先生には、同僚として特別の親しみをおぼえていましたが、学生、とりわけ、入学したての学生にとっても、教育者としての相浦先生に接してどれだけ、癒され、安心感をあたえられたことか。学生にとっても、かけがえのない教育者であったと思います。今、相浦先生のことをいろいろ思い出し、つらくもあり、残念でたまりません。ご冥福を祈ります。

神戸大学大学院法学研究科教授

吉川 元